研究ノート

学童期における発達の基本構造検出のための試み
―「３つの願い」の分析から―

富井　奈菜実[i]

本研究では，学童期における発達の基本構造を検出するための予備的作業として，小学校１年生から６年生を対象に「３つの願い」を実施し，発達の基本構造の存在やその特徴について検討した。学童期における「３つの願い」の回答内容の特徴としては，学童期以外の時期に比べて，将来の夢や仕事および社会的正義のカテゴリーが多いことが示唆された。ただし，将来の夢や仕事のカテゴリーは11歳後半以降は急減し，代わりに自己変革の回答が増えるなど，高学年では現実的な自己理解が深まることなどが特徴と考えられた。また回答状況や回答方略などの年齢的推移を分析した結果，発達の基本構造に関連するとも思われる４つの時期区分を仮説的に取り出すことができた。時期Ⅰは６歳前半から８歳前半，時期Ⅱは８歳後半から９歳後半，時期Ⅲは10歳前半から11歳前半，時期Ⅳは11歳後半から12歳前半であった。以上の時期区分は，回答文の事例検討を踏まえれば，ピアジェのいう自己中心性や具体的操作，田中昌人のいう集団的自己の発達によって特徴づけられると推察された。

キーワード：学童期の発達，発達の基本構造，３つの願い

１　問題と本研究の着眼点

(1) 本研究の概要

本研究は，学童期における発達の基本構造を検出するためのパイロット・スタディーである。

生涯発達をかかげる発達研究にとって，学童期は非常に重要な意味をもっている。

その一つは，学校教育の現場でさまざまな問題について，発達という観点から迫ろうとすると，学童期の発達理解は不可欠であるからである。

しかし，第二に，学校教育では，当然のことながら目的意識的計画的な教育が展開され，そこで形成されるさまざまな能力は，まずそうした教授―学習の結果として理解される。そこに，発達固有の法則性の存在を前提とする場合，両者をどう区別して発達理解として構成しうるのか，という方法論上の課題が存在している。能力そのものは，何らかの課題を提示し，それへの適応として操作的に測定可能であるとしても，そうした能力が発達とどのように関連しているのかは別途議論が必要である。例えば実際，新版Ｋ式発達検査2020の標準化データ（新版Ｋ式発達検査研究会，2020）によると，全領域の得点と年齢（日齢）の関係は，概ね生活年齢10歳までは比例の関係にあるが，10歳以降になると得点の分散が大きくなり，線形に増加しなくなっていくことが示されている（p. 33; 図Ⅱ-1）。これは，10歳以降の発達は課題に対する適応という枠組みのもとでは適切に把握できない可能性を示唆しているとともに，10歳頃にそうした現象を起こす何らかの発達的な変

i　奈良教育大学特別支援教育研究センター准教授

化があることを意味している可能性がある。その場合には，この時期の子どもがどのように課題に取り組むのかを「できる」・「できない」という枠を超えて検討する必要があるだろう。

第三に，人間を社会的存在として見た場合，その発達像は，分析的に取りだした能力の集合体として再構成するだけでは不充分であることもまた明らかである。一方，上述のような学校教育の現場で生起している問題に迫ろうとする場合，人格や人格形成とどう関連づけて発達理解をすすめるのか，も大きな課題となっている。

以上のような課題は，いずれも学童期発達研究の前提となる独自の方法論的課題として検討されるべきものであるといえる。

以上のような方法論上の課題を念頭におきながら既存の手法を用いることで，学童期における発達研究の分析方法の探索を試みるパイロット・スタディーとして，カナーの「３つの願い」をとりあげ，小学生児に実施した。

「３つの願い」は，カナーによれば「投影法」に属する面接法の一つとして提起された。なお，本研究では，カナーの設問を簡略化して実施した。カナーとの方法の違いは，本研究は質問紙であること，カナーの場合には“架空の妖精”が存在するとして願いを回答させたが，本研究ではそうした条件は提示せずに願いを回答させたことである。

これを取り上げた理由として，次の三点がある。

第一に，「投影法」であるのでさまざまな心理状態を反映している可能性があり，知能検査・発達検査を構成する下位項目のような課題適応度以外の側面を取り出せる可能性がある。

第二に，設問がもとめている回答は３回答で，分析対象が限定的である。

第三に，本来は面接によって実施するものであるが質問紙におきかえたことで，投影法としての分析精度に大きな限界が生じる可能性があるが，一方で横断的な資料を得ることができる。

(2) 先行研究の概観と課題

竹内（2017）は，「３つの願い」がどのような心的内容に迫るのかという点について，先行研究のレビューを行った。竹内（前出）によれば，その一つは先述したように，児童精神医学臨床において主にカナーによってクライエントである子どもの内面理解のために用いられていたという。またもう一つには，回答内容のカテゴリー分類によって，年齢的特徴や発達的特徴を捉えるために用いられていたという。なお，これらの研究は「３つの願い」の定量的なデータを得ることが目的の一つとされていた。

本研究は学童期の発達が焦点となるため，回答内容のカテゴリー分類の研究を，学童期の発達研究という視点から概観し，その限界点を述べておく。

竹内（前出）は，Winkley（1982）の研究を取り上げており，比較的わかりやすいカテゴリー分類であると述べている。また日本の調査においても，このカテゴリー分類がしばしば使用され，その調査において Winkley（前出）の分類が適用可能と報告されたことを述べた。それは以下のような研究である。

まず Winkley（前出）は，10歳から11歳の，一般的な児童と，精神科医の診察を受けた児童を対象とし，２グループの比較，一般的な児童の男女差の比較，両グループにおける一般的な願望の特徴を検討した。なお，約半数は質問紙によって，残り半数は面接によって回答が得られた。教示では，“魔法によって願いが叶うとしたら”と説明がなされた。分析に用いられたカテゴリー分類は「A. 所有物（Possessions）」，「B. 社会正義（Social conscience or concern）」，「C. 将来（Achievements for future）」，「D. 個人要求（Personal need）」，「E. 環境変化（Change in home/school）」，「F. 旅行（Travel）」，「G. 恐怖回避（Removal of fears）」，「H. その他（Unclassifiable）」の８カテゴリーで，各カテゴリーには下位カテゴリーも設定されていた。上述の比較検討によって一般的な児童と精神科医の診療を受けた児童や男女の差等が明らかにされたが，学童期の発達的特徴は検討されなかった。

金田（1979）は「３つの願い」を「子どもの人格，内面理解の新しい方法の試みとして臨床心理学が生み出した投影法と生活教育実践の中で創造された生活表現教育（典型的には生活つづり方教育）の接点を求める方法」（p. 176）として用いた。教示では“魔法使い”の存在が提示された。対象は小学校１年生と４年生，大学生で，「①ほしいもの」，「②自分の性格・自分自身について」，「③やりたいこと，そうなりたいこと」，「④社会的なねがい」，「⑤その他」の５カテゴリーを設定し，各時期の発達的な特徴やその変化について検討した。この内，例えば「③やりたいこと，そうなりたいこと」については，「諸能力（できる力）をつけたい」という願望が１年生から出現するが，４年生は急増し，またその表現がより抽象的になることなどを指摘した。

また清水らの一連の研究（清水里美・清水寛之・千野，1993; 清水寛之・清水里美・千野，1993; 清水里美・清水寛之・千野，1994; 清水寛之・清水里美・千野，1994; 清水寛之・清水里美・千野，1995; 清水寛之・清水里美・千野，1996）では，中学生，女子短大生，大学生，高齢者の「３つの願い」の反応の特徴を，質問紙を用いて検討している。いずれも教示では“神様”の存在が提示された。これらの研究では Winkley（前出）のカテゴリー分類に基づいた検討がなされ，このカテゴリーが適用可能であったことが報告されている。また一連の研究では学童期は対象とされていないが，中学生を対象とした研究（清水里美ら，1993）では，学年や男女の違いなどが検討され，全体の傾向としては，順に「所有物」，「個人要求」，「恐怖回避」が多かったという。また「社会正義」という抽象的な反応が特に中学３年生で極端に低くなることを指摘し，単に認知発達のレベルと結びついているだけでなく，個人が社会的状況を自分自身の課題としてどのように取り込んでいるかなどに注目することの重要性が述べられた。

藤崎・麻生（2018）は，日本で組織的に検討されてこなかった幼児期を対象とし，インタビューによって，また先述の中学生を対象とした研究（清水里美ら，1993）と比較しながらこの時期の特徴を検討した。インタビューの教示では，“神様･仏様”の存在が提示された。この研究でも Winkley（前出）のカテゴリー分類に基づいて検討がなされた。その結果，幼児期では例えば「社会正義」などの抽象的な願いではなく，日常に基づく具体的な願いが多いことや，年長児になると「将来の姿・仕事」の回答が増えることが示された。

以上の先行研究で得られた結果は，いずれも定量的な研究であり，各時期の特徴を一般的に示すものとして重要である。

ただし，次の２点を課題として指摘することができる。１点目は小学生全体を対象とした調査が行われていないことである。Winkley（前出）や金田（前出）の研究ではそれぞれ小学生が対象に含まれてはいるものの，体系的な検討はまだ行われてない。

２点目は，以上の先行研究では年齢的特徴や発達的特徴が示されてはいるが，そうした特徴がなぜ現れるのかという発達の基本構造に関する議論はまだなされていないという点である。

(3) 分析の着眼点

上記課題に照らして，次のように分析をした。

なお本研究では，生活年齢群間の横断的な資料を得ようとするが，小学生期では９，10歳頃に発達の基本構造の変化の存在が示唆されている。そのため，本研究では，年齢群の幅を狭くし，その変化の様相をできるだけ精密に取り出すため，６か月間隔の年齢群を設定した。

横断的検討では，次の３つの分析を試みた。

分析１では，「３つの願い」の設問に対する回答状況を分析した。質問紙に対する回答には，当然設問の理解という面も関与する。同時に，それが「投影法」であることから，自己の内面を開示することへの心理的抵抗なども予想され，回答状況の年齢的変化にこれらの要因が関与している可能性がある。

分析２では，「３つの願い」の回答内容を先行研究の結果と比較し，小学生期の回答内容の特徴を示そ

うとした。

ピアジェは小学生期に脱中心化が生じていると考えた（Piaget, J. et Inhelder, B., 1966; 波多野完治・須賀哲夫・周郷博訳，1969）。「３つの願い」の設問は「あなたの願い」を問うものであるが，そうした設問の国語的理解自体は，年齢・学年の進行とともに上昇すると考えられる。一方，「脱中心化」は年齢・概念の進行にともなってより多く見られるようになる可能性がある。そこで，分析３では，「脱中心化」を念頭において，回答内容が自己に密着したものになっているか否かに注目した。

次に，各回答の個人内連関に注目して回答方略を分析した。ここでは，「３つの願い」の設問では回答相互のつながりは回答者の自由にまかされている。ただ，回答者の中で，そこに関連を付与しようとすることはありえる。ここでは，回答相互の関連を回答者の回答方略としてとらえ，そうした個人内の連関性を回答方略として注目した。

2　方法

(1) 研究倫理上の配慮

本研究の実施にあたっては，事前に該当小学校校長と学級担任教員に研究依頼文書と調査実施方法説明書を示し了解を得た。

同時に，質問紙の回答にあたっては無記名とし児童個人の回答内容が特定されないこと，回収した質問用紙の管理について施錠可能な保管庫に研究終了まで保存し研究終了時に廃棄する，など研究倫理面の配慮についても説明し研究内容と同様に了解を得た。また質問紙配布時に研究参加の児童の自己決定を尊重し参加辞退しうることについてもあらかじめ参加児童に伝えることを依頼した。

(2) 研究参加児

本研究に参加したのは関西圏のＡ小学校に通う１年生から６年生までの児童434人で，内訳は１年生85人（男児38人／女児46人／不明１人），２年生59人（男児26人／女児32人／不明１人），３年生73人（男児40人／女児33人），４年生76人（男児40人／女児36人），５年生71人（男児32人／女児39人），６年生70人（男児38人／女児30人／不明２人）であった。このうち，性別と誕生月が不明であった８人は分析対象から除外した。分析の対象とした質問紙は426件（男児210件／女児216件）である。

先述の通り，本研究では６ヶ月間隔の年齢群を設定して分析を進める。表１は分析対象児となった426人の年齢群ごとの構成である。

表１　分析対象児の構成

年齢群	月齢範囲（ヶ月）	人数（人）	男児／女児（人）	平均月齢（ヶ月）
６歳前半	77	10	3/7	77.0
６歳後半	78-83	34	18/16	80.6
７歳前半	84-89	42	17/25	86.3
７歳後半	90-95	26	15/11	92.4
８歳前半	96-101	39	18/21	98.9
８歳後半	102-107	39	18/21	104.7
９歳前半	108-113	33	15/18	110.7
９歳後半	114-119	31	17/14	116.3
10歳前半	120-125	43	25/18	122.8
10歳後半	126-131	30	12/18	129.6
11歳前半	132-137	39	19/20	134.6
11歳後半	138-143	32	17/15	140.8
12歳前半	144-148	28	16/12	145.9
合計	—	426	210/216	—

(3) 手続き

質問紙の配布と回収は，2019年７月下旬（夏休み前）もしくは９月上旬（夏休み後）に実施した。具体的な実施日は各学級担任の判断に委ねた。

配布時に，児童からの質問紙の設問への質問があった場合に誘導をさけるため「あなたの思う通りに書いてください」と答えること，また未回答であっても無理に回答を促さないこと，などについて学級担任にあらかじめ説明をした。

(4) 質問紙：３つの願い

質問紙は，A4大の用紙に「あなたの三つのねがい

をおしえてください」と教示文を記載し，その下に「わたしの一ばん目のねがいごとは　＿＿＿　です。」と回答部分を空白にした回答欄を３行記載した（空白箇所の幅は8cm,「一ばん目」の箇所は，二ばん目，三ばん目と続く）。

また別に基本属性（学年，性別，誕生月）を記載する欄を設けた。これらは，いずれも択一式とした。

3　結果

(1) 横断的検討

① 分析１：回答状況

分析対象児426人の回答状況を表２に，その年齢的推移を図１にそれぞれ年齢群ごとに示した。なお本研究では３回答に満たない２回答と１回答の特徴や違いは議論の対象としないため，2/1回答としてまとめた。

分析対象児426人の回答状況は，３回答318人（74.6％）０回答32人（7.5％）で，３回答した場合が約75％であった。面接に比して回答状況が下がると予想されたが質問紙であっても一定の回答数が得られた。

年齢群別に見ると，６歳前半：３回答９人（90.0％）０回答１人（10.0％），６歳後半：３回答27人（79.4％）０回答４人（11.8％），７歳前半：３回答28人（66.7％）０回答４人（9.5％），７歳後半：３回答17人（65.4％）０回答３人（11.5％），８歳前半：３回答24人（61.5％）０回答２人（5.1％），８歳後半：３回答31人（79.5％）０回答３人（7.7％），９歳前半：３回答24人（72.7％）０回答２人（6.1％），９歳後半：３回答25人（80.6％）０回答１人（3.2％），10歳前半：３回答37人（86.0％）０回答３人（7.0％），10歳後半：３回答27人（90.0％）０回答（0.0％），11歳前半：３回答31人（79.5％）０回答１人（2.6％），11歳後半：３回答19人（59.4％）０回答３人（9.4％），12歳前半：３回答19人（67.9％）０回答５人（17.9％）であった。

回答状況の年齢的推移をみると，３回答の出現割合は６歳前半から８歳前半にかけて減少していくが，８歳後半で増加した後，９歳前半で再び若干減少し10歳後半まで再度増加する。その後は11歳後半にかけて減少していき，12歳前半では若干増加する，というもので，回答状況の推移を教示文の理解力など単一の要因では説明できないことが示唆された。

一方，１つも願いを回答しなかった（０回答）児童は，10歳後半以外の全ての年齢群に出現しているが，最も出現割合が高いのは12歳前半であった。こうした無回答は，10歳後半ののち11歳前半から増加

表２　回答状況

年齢群	３回答	2/1回答	０回答
６歳前半 （n=10）	9 90.0%	0 0.0%	1 10.0%
６歳後半 （n=34）	27 79.4%	3 8.8%	4 11.8%
７歳前半 （n=42）	28 66.7%	10 23.8%	4 9.5%
７歳後半 （n=26）	17 65.4%	6 23.0%	3 11.5%
８歳前半 （n=39）	24 61.5%	13 33.3%	2 5.1%
８歳後半 （n=39）	31 79.5%	5 12.8%	3 7.7%
９歳前半 （n=33）	24 72.7%	7 21.2%	2 6.1%
９歳後半 （n=31）	25 80.6%	5 16.2%	1 3.2%
10歳前半 （n=43）	37 86.0%	3 7.0%	3 7.0%
10歳後半 （n=30）	27 90.0%	3 10.0%	0 0.0%
11歳前半 （n=39）	31 79.5%	7 18.0%	1 2.6%
11歳後半 （n=32）	19 59.4%	10 31.2%	3 9.4%
12歳前半 （n=28）	19 67.9%	4 14.2%	5 17.9%
合計 （n=426）	318 74.6%	76 17.8%	32 7.5%

※上段は人数

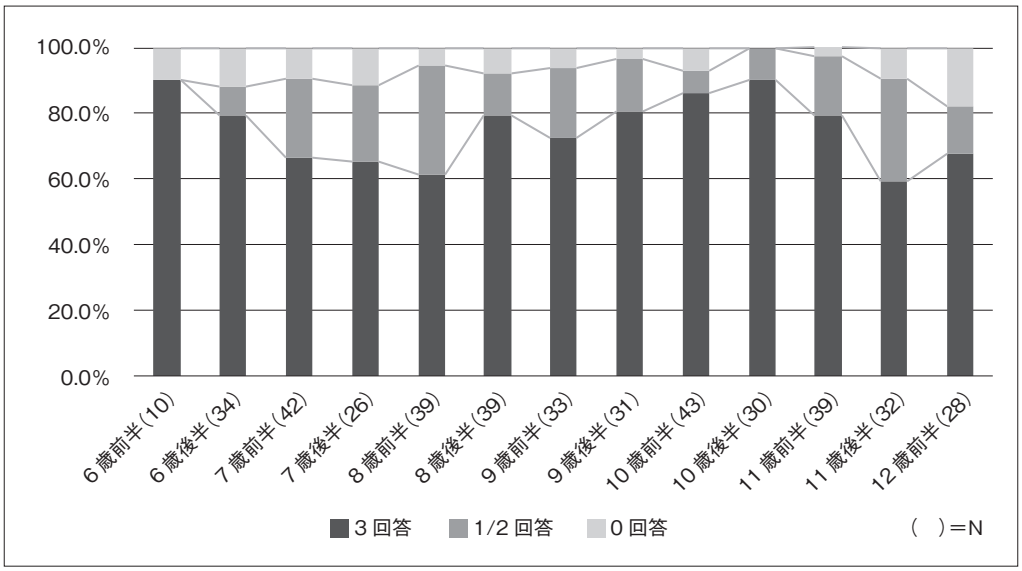

図１　回答状況の年齢的推移

をしており，この時期の無回答は，自己の内面の開示に対する抵抗などが10歳以降顕在化してくる児童が増えているとも推測された。

② 分析２：回答内容

先述した先行研究の概観から，Winkley（前出）のカテゴリー分類に基づいた定量的な研究が蓄積されていたことから，本研究でもこのカテゴライズを援用した。

なお，本研究では，清水らの一連の研究（前出）や藤崎・麻生（前出）で，Winkley（前出）によるカテゴリー分類を一部拡張したり，新たなカテゴリーを設けて分析していたが，それらとの比較も可能なように藤崎・麻生（前出）の示したカテゴライズにしたがった。以上を踏まえたカテゴリーは「A. 所有物」「B. 社会的正義」「C. 将来・仕事」「D. 個人的要求：1. 一般的幸福 / 2. 現実的要求 / 3. 自己変革 / 4. 自己の魔術的変化や考え / 5. 人間関係」「E. 家や学校の環境の変化」「F. 海外旅行・冒険・休暇」「G. 恐怖からの回避」「H. その他」「I. なし・わからない」の９カテゴリーと「D. 個人的要求」の下位５カテゴリーである[1)]。研究参加児の回答を以上のカテゴリーによって分類し，その出現状況を年齢群ごとに示したものが表３である[2)]。

表３より「I. なし・わからない」を除いて最も出現数が多いのは「D-3. 自己変革」（227回答）で，ほぼ同数なのが「C. 将来・仕事」（224回答）であった[3)]。次いで「D-2. 現実的要求」（143回答），「A. 所有物」（118回答），「G. 恐怖からの回避」（97回答），「B. 社会的正義」（89回答）という順で，以上は相対的に回答数の多いカテゴリーであった。

年齢的な特徴としてみた場合，幼児期（藤崎・麻生，前出）や中学生（清水里美ら，前出）では「A. 所有物」「D. 個人的要求」が多いとされていたが，以上は本研究の小学生においても同様であった。

一方，「C. 将来・仕事」の回答が比較的多いという結果は小学生期の特徴と言えるかもしれない。これは藤崎・麻生（前出）の先行研究において，中学生（清水里美ら，前出）ではあまり多くないが，幼児期では中学生に比べれば多く，さらに学年とともに増加すると指摘されていた。

さらに本研究の結果（表３）から年齢的変化をみてみると，「C. 将来・仕事」の出現率は，11歳前半までは７歳後半を除く年齢群で概ね20%前後であっ

たが，11歳後半，12歳前半では約３％と急減していた。

加えてこの11歳後半と12歳前半の「D-3. 自己変革」に着目すると，10歳後半で出現率が急減した後に再度増加していた。

以上より，幼児期の終わり頃に未来という時間軸をもつようになって以降，将来を期待をもって捉えるようになるが，小学校高学年頃からは現実的に自己を捉え，自分を変えていきたい，あるいは変える必要があるというように客観視して考えるようになり，その結果，将来には言及しないという特徴が示されたのかもしれない。

ほかに本研究では「B. 社会的正義」も相対的に出現の多いカテゴリーであったが，幼児期（藤崎・麻生）では回答者はなく，中学生（清水ら）でも２割程度とあまり多くなかった。

また小学生（1年生・４年生）を対象に含んだ金田（1979）の研究では，分類カテゴリーは独自に設定されており，直接の比較はできないものの，「社会的な願い」は１年生と４年生ではほぼ出現しないという結果であった。本研究では９歳後半から出現数が急増していたが，金田（前出）の研究との違いはここでは検討することができない。しかし少なくとも幼児期にはみられないことを踏まえれば，学童期の発達的特徴を検討する上で重要なカテゴリーとなる可能性が示唆される。

表３　先行研究のカテゴリーに基づく回答内容の分類

	A．所有物	B．社会的正義	C．将来・仕事	D．個人的要求					E．家や家族の環境の変化	F．海外旅行・冒険・休暇	G．恐怖からの回避	H．その他	I．なし・わからない
				1．一般的幸福	2．現実的要求	3．自己変革	4．自己の魔術的変化や考え	5．人間関係					
６歳前半	1	0	6	0	1	10	6	3	0	0	0	0	3
(n=10)	3.3%	0.0%	20.0%	0.0%	3.3%	33.3%	20.0%	10.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%
６歳後半	20	4	25	0	9	11	5	5	0	1	1	4	17
(n=34)	19.6%	3.9%	24.5%	0.0%	8.8%	10.8%	4.9%	4.9%	0.0%	1.0%	1.0%	3.9%	16.7%
７歳前半	6	2	25	7	18	20	6	9	0	2	5	0	26
(n=42)	4.8%	1.6%	19.8%	5.6%	14.3%	15.9%	4.8%	7.1%	0.0%	1.6%	4.0%	0.0%	20.6%
７歳後半	8	3	7	0	13	14	1	7	0	5	2	0	18
(n=26)	10.3%	3.8%	9.0%	0.0%	16.7%	17.9%	1.3%	9.0%	0.0%	6.4%	2.6%	0.0%	23.1%
８歳前半	8	5	21	6	9	20	3	5	0	3	12	3	22
(n=39)	6.8%	4.3%	17.9%	5.1%	7.7%	17.1%	2.6%	4.3%	0.0%	2.6%	10.3%	2.6%	18.8%
８歳後半	11	1	31	3	12	23	3	4	1	0	11	0	17
(n=39)	9.4%	0.9%	26.5%	2.6%	10.3%	19.7%	2.6%	3.4%	0.9%	0.0%	9.4%	0.0%	14.5%
９歳前半	7	3	22	3	10	19	3	3	0	1	11	0	17
(n=33)	7.1%	3.0%	22.2%	3.0%	10.1%	19.2%	3.0%	3.0%	0.0%	1.0%	11.1%	0.0%	17.2%
９歳後半	4	15	17	1	8	18	3	5	0	4	8	0	10
(n=31)	4.3%	16.1%	18.3%	1.1%	8.6%	19.4%	3.2%	5.4%	0.0%	4.3%	8.6%	0.0%	10.8%
10歳前半	14	14	22	0	15	28	2	3	3	3	12	0	13
(n=43)	10.9%	10.9%	17.1%	0.0%	11.6%	21.7%	1.6%	2.3%	2.3%	2.3%	9.3%	0.0%	10.1%
10歳後半	13	10	21	2	6	7	1	14	1	1	8	1	5
(n=30)	14.4%	11.1%	23.3%	2.2%	6.7%	7.8%	1.1%	15.6%	1.1%	1.1%	8.9%	1.1%	5.6%
11歳前半	8	14	21	1	14	18	1	4	1	4	17	0	14
(n=39)	6.8%	12.0%	17.9%	0.9%	12.0%	15.4%	0.9%	3.4%	0.9%	3.4%	14.5%	0.0%	12.0%
11歳後半	10	11	3	0	19	18	0	4	2	1	4	0	24
(n=32)	10.4%	11.5%	3.1%	0.0%	19.8%	18.8%	0.0%	4.2%	2.1%	1.0%	4.2%	0.0%	25.0%
12歳前半	8	7	3	1	9	21	4	3	0	1	6	0	21
(n=28)	9.5%	8.3%	3.6%	1.2%	10.7%	25.0%	4.8%	3.6%	0.0%	1.2%	7.1%	0.0%	25.0%
合計	118	89	224	24	143	227	38	69	8	26	97	8	207
(n=426)	9.2%	7.0%	17.5%	1.9%	11.2%	17.8%	3.0%	5.4%	0.6%	2.0%	7.6%	0.6%	16.2%

※上段は回答数

以上，小学生の回答状況を先行研究との比較を通じて概観した。ただしこれらの傾向は，小学生に固有である可能性もあるが，質問紙と面接法の違い，教示における神様等の架空の存在の有無の違いなどによる可能性もあり，さらに検討する必要があるだろう。

③ 分析３：願いの主語・対象からみた特徴

分析３では，「３つの願い」の設問に対する回答文の中に，回答者以外を主語としている回答を「他者含有型」とした。また，回答文の主語が回答児に限定していると思われるものを「自己直結型」とした。

「３つの願い」の設問では，願いを３つの回答を求めているので，「他者含有型」と「自己直結型」とがどのようなパターンで出現するかを表４で示す。

表４の回答パターンの出現状況をみると３回答全てが「自己直結型」（以下「自自自」）である場合が全体の約半数の51.4％であった。ただし，年齢的推移（表５）をみると全てが「自己直結型」の回答であった「自己直結型」児は，６歳前半・６歳後半では90％以上を占めているのに対し，以後は11歳前半の39.5％まで概ね減少し，11歳後半・12歳前半で再び70％前後にと増加している。さらにくわしく表５で「自己直結型」児の変動を見ると，減少傾向を示す６歳前半から11歳前半までの時期にも一度15％ほど上昇する時期が８歳後半・９歳前半にある。

これを「他者含有型」回答が１回答でも存在していた「他者含有型」児の推移に注目すると，図２のようになる。

図２では年齢が高くなるにしたがって「他者含有

表４　３回答中における「他者含有型」と「自己直結型」の出現パターン

	３回答								２回答				１回答		０回答
	自自自	自自他	自他自	他自自	自他他	他他自	他自他	他他他	自自	自他	他自	他他	自	他	
６歳前半	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
(n=10)	90.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%
６歳後半	25	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0	4
(n=34)	73.5%	0.0%	0.0%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	2.9%	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	5.9%	0.0%	11.8%
７歳前半	25	1	1	2	0	0	0	0	4	0	0	0	3	2	4
(n=42)	59.5%	2.4%	2.4%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9.5%	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%	4.8%	9.5%
７歳後半	14	0	1	2	0	0	0	0	2	0	1	0	2	1	3
(n=26)	53.8%	0.0%	3.8%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	3.8%	0.0%	7.7%	3.8%	11.5%
８歳前半	14	2	1	3	1	0	1	2	7	1	2	0	3	0	2
(n=39)	35.9%	5.1%	2.6%	7.7%	2.6%	0.0%	2.6%	5.1%	17.9%	2.6%	5.1%	0.0%	7.7%	0.0%	5.1%
８歳後半	25	2	1	3	0	0	0	0	2	0	0	0	1	2	3
(n=39)	64.1%	5.1%	2.6%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.1%	0.0%	0.0%	0.0%	2.6%	5.1%	7.7%
９歳前半	19	0	0	4	0	0	1	0	2	0	1	0	2	2	2
(n=33)	57.6%	0.0%	0.0%	12.1%	0.0%	0.0%	3.0%	0.0%	6.1%	0.0%	3.0%	0.0%	6.1%	6.1%	6.1%
９歳後半	13	1	1	4	0	3	2	1	2	0	1	0	2	0	1
(n=31)	41.9%	3.2%	3.2%	12.9%	0.0%	9.7%	6.5%	3.2%	6.5%	0.0%	3.2%	0.0%	6.5%	0.0%	3.2%
10歳前半	22	1	3	9	0	0	0	2	1	1	0	0	0	1	3
(n=43)	51.2%	2.3%	7.0%	20.9%	0.0%	0.0%	0.0%	4.7%	2.3%	2.3%	0.0%	0.0%	0.0%	2.3%	7.0%
10歳後半	14	1	1	6	0	3	1	0	2	1	0	0	0	1	0
(n=30)	46.7%	3.3%	3.3%	20.0%	0.0%	10.0%	3.3%	0.0%	6.7%	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%
11歳前半	13	1	5	8	1	1	2	0	1	0	2	0	1	3	1
(n=39)	33.3%	2.6%	12.8%	20.5%	2.6%	2.6%	5.1%	0.0%	2.6%	0.0%	5.1%	0.0%	2.6%	7.7%	2.6%
11歳後半	12	1	0	2	1	0	1	2	4	1	0	0	5	0	3
(n=32)	37.5%	3.1%	0.0%	6.3%	3.1%	0.0%	3.1%	6.3%	12.5%	3.1%	0.0%	0.0%	15.6%	0.0%	9.4%
12歳前半	14	0	1	1	1	1	0	1	1	0	0	1	1	1	5
(n=28)	50.0%	0.0%	3.6%	3.6%	3.6%	3.6%	0.0%	3.6%	3.6%	0.0%	0.0%	3.6%	3.6%	3.6%	17.9%
合計	219	10	15	45	4	8	8	9	29	4	7	1	22	13	32
(n=426)	51.4%	2.3%	3.5%	10.6%	0.9%	1.9%	1.9%	2.1%	6.8%	0.9%	1.6%	0.2%	5.2%	3.1%	7.5%

※上段は人数

表５　「自己直結型」児と「他者含有型」児の出現率

年齢群	「自己直結型」児	「他者含有型」児
6 歳前半 （n=9）	9 100.0%	0 0.0%
6 歳後半 （n=30）	28 93.3%	2 6.7%
7 歳前半 （n=38）	32 84.2%	6 15.8%
7 歳後半 （n=23）	18 78.3%	5 21.7%
8 歳前半 （n=37）	24 64.9%	13 35.1%
8 歳後半 （n=36）	28 77.8%	8 22.2%
9 歳前半 （n=31）	23 74.2%	8 25.8%
9 歳後半 （n=30）	17 56.7%	13 43.3%
10歳前半 （n=40）	23 57.5%	17 42.5%
10歳後半 （n=30）	16 53.3%	14 46.7%
11歳前半 （n=38）	15 39.5%	23 60.5%
11歳後半 （n=29）	21 72.4%	8 27.6%
12歳前半 （n=23）	16 69.6%	7 30.4%
合計 （n=394）	270 68.5%	124 31.5%

※上段は人数

型」児は増加傾向にあり，10歳後半から11歳前半の時期に半数を超えた後，30% 前後に減少するという複雑な経過をたどっている。

また図２をみると,「他者含有型」児は年齢とともに増加傾向にあるが単調増加ではないことから，ここでも複数の要因が相互に関連し合いながら作用している可能性が示唆された。

④ 横断的検討のまとめ

以上「３つの願い」の回答状況（分析1），回答内容（分析2），回答文の主語に自己以外の他者を含むかどうか（分析3）について, 年齢群ごとの推移をみた。

分析１では，回答状況の推移では,「回答なし」が11歳前半から再度出現し12歳前半まで増加傾向を示すが,「３回答」は，８歳前半まで減少し，８歳後半で上昇に転じ，９歳前半で減少，再び９歳後半と10歳前半で増加し，11歳前半・11歳後半で減少し，12歳前半で増加に転じるという複雑な推移を示している。無回答の背景には，質問用紙の説明文の理解とともに自己開示への抵抗,「３回答」の推移では事象の概括や類推など，の要因が関係しているのではないか，など複数要因の関与の可能性が示唆される。

一方，分析３では,「他者含有型」児は増加傾向にあるものの11歳後半・12歳前半では大きく減少している。

また表４より,「他者含有型」児のなかで最も出現率の高い回答パターンである「他自自」は10歳前半で急増し，続く10歳後半，11歳前半も含め出現率がいずれも２割を超えていた。同様に「他者含有型」回答を１つ含む「自自他」と「自他自」もこの時期は出現率が比較的多い。図２によると「他者含有型」児は10歳後半では出現率が５割近くなり，11歳前半では唯一５割を超える。つまり，10歳前半から11歳前半までの時期は，設問に対して逸脱する児童が前後の年齢群に比べて多く，かつこの時期内においては約半数の児童がそれに該当するという特徴が示された。

以上のような推移を，前の年齢群に対する増減という傾向性に注目すると，年齢群の特徴として次のような４つの時期区分が仮説的に取り出されるのではないかと考えられた。

時期Ⅰ：６歳前半から８歳前半，時期Ⅱ：８歳後半から９歳後半，時期Ⅲ:10歳前半から11歳前半，時期Ⅳ：11歳後半から12歳前半，である。

時期Ⅰでは，分析１で見た「３回答」は減少傾向，分析３でみた「他者含有型」児は増加傾向をしめすというように両者は反転傾向を見せる。時期Ⅱでは，

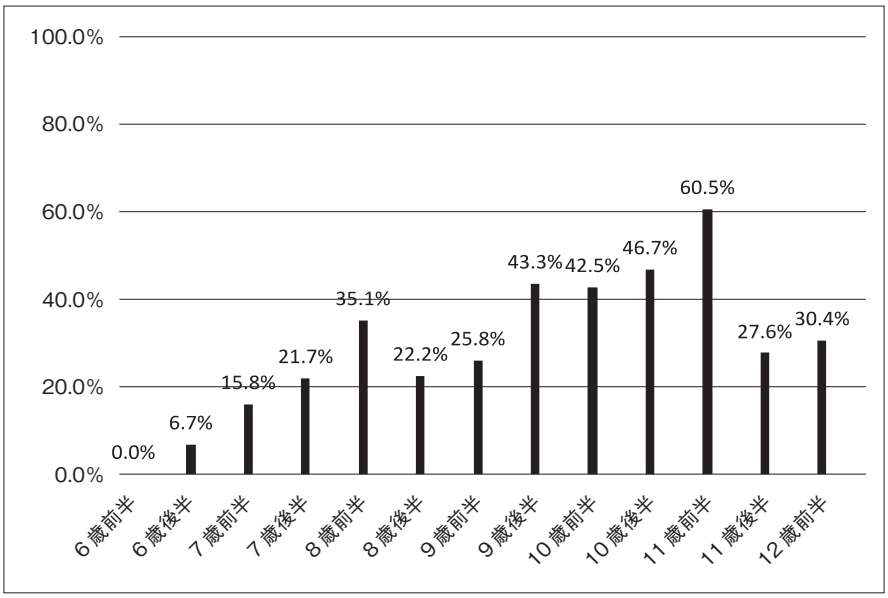

図２　「他者含有型」児の出現率

時期Ⅰと同様に両者の増減の傾向は反転傾向がありつつも９歳後半のように同期傾向が生じてくる。時期Ⅲでは，いずれも増加で同期しているといえるが11歳前半のように反転傾向を示す時期がみられる。時期Ⅳでは，増減の傾向が同期している。

この各期の特徴は，いくつかの指標の出現率の増減の傾向性をもとにみて，仮説的に時期区分を試みたものであるが，そうしたそれぞれの時期の特徴を個人内連関として，回答方略に注目して分析した。なお，本研究ではこれ以降は「他者含有型」児を中心に分析を行い，議論を進める。

(2) 回答方略の検討：「他者含有型」児の分析

① 回答内容の時期的特徴

ここでは「他者含有型」児の願いの主語・対象の内実から時期Ⅰ～Ⅳの特徴を検討する。

願いの主語･対象として頻出する「他者」は，「具体的他者」(「おとうさん」「新友」(ママ。「親友」と解釈）等)，「みんな」，「家族」(集合名詞として)，「世界・社会」(主語が「世界が」とされているものや主語の記述はないものの「平和」など社会全体の願いを述べたもの）であった。これらを主語・対象とした回答が各児童の回答内に１つでもあった場合の時期ごとの出現状況を表６に示した。

「具体的他者」はそのほとんどが家族の構成員であったが，そうした身近な他者をあげる児童は時期Ⅰに多く，また相対的に他の時期では出現数は少ないことがわかった。

「みんな」「家族」「世界･社会」はいずれも個人ではなく集団を表す集合名詞である。

このうち「みんな」はこれも相対的に時期Ⅰに現れやすく，他の時期ではあまり多くはみられなかった。

「家族」は時期Ⅰ～時期Ⅲにおける各時期内で最もよく出現する集合名詞であった。推移としては時期Ⅰから時期Ⅱにかけては増加するが，時期Ⅱから時期Ⅲにかけて減少し，時期Ⅳでは急減していた。

「世界･社会」はとりわけ時期Ⅳでは出現率が高く，かつ時期Ⅳにおいて最もよく出現する主語・対象であった。他時期は「家族」が最も多いため，時期Ⅳは特異的である。推移としては年齢とともに出現率が増加する比較的単純な推移であるが，時期Ⅲから

時期Ⅳにかけては急増していた。

以上から，身近な個人（「具体的他者」）や「みんな」という漠然とした他者は時期Ⅰに現れやすく年齢とともに減少傾向にあることがわかった。その反面，「世界・社会」は年齢とともに増加傾向にあることがわかった。また「家族」については時期Ⅰ～Ⅲで出現しやすいものであったが，時期Ⅲから減少し始め，時期Ⅳで急減するという点に特徴があると考えられた。

なお，特に時期Ⅳは他と異なる特徴がよく現れており，その一つは「世界・社会」が他の主語・対象に比べて最も多く出現することと，また他の年齢群に比べても出現率が高いことであった。また「家族」が他の時期に比べて出現しにくいということも特徴的である。

表６　願いの主語・対象と時期ごとの出現割合

	具体的他者	みんな	家族	世界・社会
時期Ⅰ（n=26）	5 19.2%	8 30.8%	11 42.3%	4 15.4%
時期Ⅱ（n=29）	3 10.3%	3 10.3%	22 75.9%	5 17.2%
時期Ⅲ（n=54）	2 3.7%	4 7.4%	38 70.4%	12 22.2%
時期Ⅳ（n=15）	1 6.7%	2 13.3%	5 33.3%	8 53.3%

※上段は人数

② 回答文の事例検討

ここでは各時期の回答方略の特徴を具体的な回答文をもとに検討する。分析の視点としては，回答全体に統一されたテーマがあるか，テーマがある場合には，回答間がどのように関与し合うのか，に注目した。またその中でテーマとなる事象をどのように取り上げるのかにも注目し，各時期の特徴を複数の視点から抽出することを試みた。

本研究では先の①の分析で「世界・社会」を願いの主語・対象としていた児童29人（表６）を対象とした。理由としては，「世界・社会」が年齢とともに増加するという比較的単純な変化が見られたため，年齢的な特徴を検討するのに適していると考えたからである。

なおここでの事例は「他者含有型」児が対象となるが，各児童の回答文の中には「自己直結型」の回答が含まれる場合もあるため，「他者含有型」の回答には点線を引いた。また丸番号は回答の順である。

時期Ⅰ：６歳前半から８歳前半

時期Ⅰでは，回答全体でテーマを構成するケースは見られず，平和や幸せといった素朴な願いが単発で述べられるという特徴が示された。例えばCase. 236の①，Case. 256の①の回答である。

Case. 236（６歳後半）

①「まちがへえわにくらせるようにです」（ママ）

②「たんじょうびぷれぜんといろわえらべるうさきかいぬかねこかわらない。です」（ママ）

③「かわいいものがほしい」

Case. 256（７歳前半）

①「せかいのみんながしあわせにく＊＊（消した痕跡；筆者加筆）ますように」

②「こころがたすかりますように」

③「おかあさんとおとうさんとちえにおこられませんように」

一方，下記の２ケースはCase.239は①「へえわ」と②「さいがい」，Cese.275は②「せんそう」と③「へいわ」と具体的な事象（災害・戦争）を述べつつ，平和を願うという回答間の関連が見られているものの，それが意識的に行われているかについては明らかではない。

Case. 239（６歳後半）

①「せかいがへえわになりますように」（ママ）

②「さいがいがおきませんように」

③「かぞくみんながしんせつ」

Case. 275（７歳後半）
①「車やさんになること」
②「せんそうにならないこと」
③「みんななかよくへいわにくらしたいこと」

時期Ⅱ：８歳後半から９歳後半

時期Ⅱでは，回答全体のテーマが明らかに設定されていると言えるケースが確認された（Case. 98）。

この事例では「世界平和」が回答全体のテーマであることが明らかに読み取れる。また「世界平和」という目的が第１に述べられ，その後にその実現のために必要な条件や手段を述べるという関与のさせ方が特徴的であった。以上はあるテーマのもとで回答全体を構造化する方略とも言える。

Case. 98（９歳後半）
①「世界が平和になること」
②「一人一人がやさしい心を持つようになること」
③「争いが二度とないようにすること」

そのほかの事例としては「自己直結型」の回答が含まれるなど，テーマの全体性はやや欠けるが，回答が構造化されていると考えられるものがあった。

Case. 99は自身が大統領になることが手段として挙げられており，また Case. 121では平和のために解決すべきことが羅列されていると考えらえる。

Case. 99（９歳後半）
①「外国のたびをいっぱいすること」
②「大とうりょうになって人のためになること」
③「カレー屋」

Case. 121（９歳後半）
①「せんそうがおこらないこと」
②「外国のまずしい人が大人になること」
③「ねこがかいたい」

さらに，以上の目的と条件・手段の関係を意識するという特徴を通して見えてくるのは，この時期の児童にとって「世界平和」はただ漠然としたものではなく，解決すべき社会問題として捉えられ始めているのではないかことである。つまり，この時期の児童は，児童にとって具体的ではない（抽象的な）事象であっても，それを現実的な事象として，ないしは我がごととして捉えられるようになっている可能性が示唆される。

以上，テーマの発生とそれに伴う回答の構造化，および抽象的な事象の現実的な捉えの２つの特徴は時期Ⅰとの違いを表すのではないかと考えられた。

時期Ⅲ：10歳前半から11歳前半

時期Ⅱで確認された特徴は時期Ⅲでも同様に確認できるが，下記の Case. 112や Case. 171をみると，より具体的あるいは現実的な事象（ミサイル，地震，台風，水や水産資源）に迫っていると言える。またこれらは，事象の細分化が進むという捉え方もできる。Case. 112では北朝鮮や日本と国を限定しており，その現れと言えそうである。また表６の結果には含めなかった事例の中に「５－２組のみんながしあわせになること」（Case. 165, 10歳後半）という回答もあり，これも細分化された特定の集団に限定しているという特徴があるだろう。

Case. 112（10歳前半）
①「北ちょうせんがミサイルをうたない」
②「地しんがないこと（日本に）」
③「台風がないこと（日本に）」

Case. 171（10歳前半）
①「かぞくがけんこうでたのしくすごせること」
②「米や水産しげんが増えること」
③「世界が平和なこと」

時期Ⅳ：11歳後半から12歳前半

時期Ⅳも時期Ⅲと同様にテーマの設定や回答が構造化された事例が確認された（Case. 179）。

Case. 179（11歳後半）
①「世界平和」
②「かん境問題などが全て解決すること」
③「難民がいなくなること」

時期Ⅲでは確認されなかった事例として，Case. 180では②「あらそいのない平和な世界」というように,「平和」の定義あるいは条件を述べるものがあった。

Case. 180（11歳後半）
①「あらそいのない平和な世界」
②「ようかいウォッチのグッズがほしい」
③「頭がよくなりたい」

またCase. 189では②「大人になったら, たくさんの人をすくえること」というように，今現在の子どもである自分を客観的に捉えた回答を行うという特徴が示されていた。

Case. 189（12歳前半）
①「みんなに生きてほしい」
②「大人になったら, たくさんの人をすくえること」

③回答方略の検討のまとめ

以上，児童の各回答の個人内連関に注目して回答方略を分析した。時期Ⅰから時期Ⅳへ時期が進むにつれ，集団の範囲，回答のテーマ設定やそれに基づく回答文の構造化，社会問題等の事象の捉え方について年齢的な変化があることが示唆された。以下, 時期ごとに特徴をまとめる。

時期Ⅰ（6歳前半から8歳前半）では，回答に出てくる「他者」は, 具体的な個人や,「みんな」という漠然とした集合名詞が他の時期よりも使用されやすいことがわかった。集団の範囲がまだ明確化されていないことが示唆される。また回答文全体ではテーマは明確になっておらず，回答の構造化も行われない時期であった。この時，平和や幸せは素朴なものであり，人間が実現していく現実的な事象として捉えているわけではなさそうであった。

時期Ⅱ（8歳後半から9歳後半）では,「他者」として具体的な個人や「みんな」はあまり使用されなくなり,「家族」の使用が増加していた。身近ではあるものの，集団や自身がその集団の構成員であることを意識し始めるようになるのかもしれない。またこの時期は，回答全体のテーマが設定され，それに伴って回答全体が構造化される（目的と手段との関係で回答が構成される）事例が確認された。またそれと関連して，平和や幸せを漠然としたものではなく，解決すべき社会問題として現実的に捉え始めているように思われた。

時期Ⅲ（10歳前半から11歳前半）では，時期Ⅱに比べると「他者」のうちの「家族」がへり,「世界・社会」が増えるという特徴が示された。また回答文の事例においては国や学級単位で括る集団の抽出がみられた。集団の抽象化が進む一方で，細分化も行われていくという分類の階層関係を理解しているのではないかと考えられた。また社会問題等の事象に関しては，時期Ⅱよりもさらに具体的な事象が扱われ，現実的に捉えているようであった。

最後に時期Ⅳ（11歳後半から12歳前半）は,「世界・社会」を主語・対象とする児童が半数以上あり, 反対に他の時期で多い「家族」が少ないという特徴が示されていた。以上について，この時期は「他者含有型」児の出現が全体の中でも少ない（図2）ことが示されていたが，その内実としては「自己直結型」との対極で「世界・社会」をテーマにするという特徴があると考えられる。また回答文にテーマがあり，回答が構造化されるという特徴は引き続きこの時期にも見られるが，新たな特徴として,「平和」の定義づけを行うものや，自己を客観視した上で条件づけを行うものが確認された。

4　総合考察

(1) 得られた時期区分とその発達的考察

本研究では「３つの願い」を用いて，学童期における発達の基本構造を検出するためのパイロット・スタディーを行なった。その結果，仮説的ではあるものの発達の基本構造との関連が示唆される時期区分が取り出された。またこれも事例検討であるが，各時期の特徴や変化を抽出することができた。

結果 (1) の横断的検討における回答状況の年齢的推移を根拠に得られた時期区分は，時期Ⅰ：６歳前半から８歳前半，時期Ⅱ：８歳後半から９歳後半，時期Ⅲ：10歳前半から11歳前半，時期Ⅳ：11歳後半から12歳前半の４つの時期であった。以下，結果 (2) 回答方略の分析を踏まえた学童期の特徴やその変化を発達的視点から考察する。

冒頭でも述べたようにピアジェは学童期には脱中心化が生じると考えていたが，本研究ではこれを「３つの願い」の回答が自己に密着しているか否かに注目して検討した。その結果，時期Ⅱの特に９歳後半から自己に密着しない回答（「他者含有型」の回答）が生じてくるようになっていた。同時に先行研究との比較においても，社会一般を願いの対象とした「B. 社会正義」が９歳後半で急増し，また他年齢群の中で最も多い出現率となっていた。さらに回答文の分析においても時期Ⅱになると「家族」を願いの主語・対象にあげるケースが多く見られるようになっていた。以上から時期Ⅱにおいて脱中心化が生じはじめ，集団との関係で自己を位置づけるようになっていくのではないかと考えられた。

対して時期Ⅰは脱中心化がまだ生じていない時期と考えられる。本研究における様相としては「他者含有型」の回答がまだ少数であり，また「他者」の内実としては具体的な個人や，「みんな」といった漠然とした集合が用いられたりしていた。

また，脱中心化によると考えられる諸特徴は時期Ⅲでより明確に，あるいはより発展的に現れていた。それは時期Ⅲは「他者含有型」児が他の時期よりも多く，また時期Ⅲ内において各年齢群で５割前後の出現率が維持されていたことから見出すことができる。さらに回答文の分析からは，「家族」を扱う児童は減り，対して「世界・社会」を対象とする児童が増えていたことから，より普遍的な集団と自己の繋がりを捉えるようになっているのではないかとも考えられた。

さらにとりわけ時期Ⅳについては，その他の時期と明らかに異なるいくつかの特徴がみられていた。それらの特徴は，無回答者が多くなること，先行研究との比較において「C. 将来・仕事」が急減して「D-3. 自己変革」が増加すること，「他者含有型」児が他年齢群より少ないこと，およびその「他者含有型」児の多くは社会問題に言及していることであった。大まかな考察にはなるが，自己や社会的状況に対する現実みが増すことが特徴であると考えられ，またそうした捉えの中で自己を開示することを控えたり，自己の現在や将来を憂うようになったりするのではないだろうか。こうしたこともまた，脱中心化が進み，自己を客観視するようになったからではないかと推察される。

(2) 発達段階説との比定の試み

ここまでの議論において，時期Ⅱから時期Ⅲにおいてピアジェのいう脱中心化が進むのではないかと考えられた。また序章にて９，10歳頃に発達の基本構造の変化がある可能性を指摘したが，本研究の結果は，脱中心化の過程を背景とした基本構造の変化を示唆しているのではないだろうか。

またピアジェは論理的思考の発達の理論化を試みていたが，本研究では具体的操作段階における論理的思考の特徴と思われる事例が確認された。その一つは，時期Ⅱ以降みられるようになった回答全体にテーマが設定され，回答が構造化されるという特徴である。また時期Ⅲにみられた集団の単位の限定（国や学級）を行うとった特徴も確認されたが，これはクラスの階層関係を理解するという一つの群性体の

獲得を示しているのではないかと推測された。

以上，本研究で得られた知見とピアジェの理論はよく適合していると言え，本研究で得られた時期区分の発達的解釈においてピアジェの発達段階説は有用な仮説の一つになると考えられた。仮にその比定を試みるならば[4)]，時期Ⅰ（６歳前半から８歳前半），時期Ⅱ（８歳後半から９歳後半），時期Ⅲ（10歳前半から11歳前半）は具体的操作段階，時期Ⅳ（11歳後半から12歳前半）は形式的操作の準備段階にあたるのではないかと考えられた。また本研究で特徴的であった時期Ⅱから時期Ⅲで見られた変化は，具体的操作の体系的組織化の段階への移行とみることもできるかもしれない。

ただ，ピアジェは９，10歳頃の発達の節目は，具体的操作段階内の第２の下位段階（上記の具体的操作の体系的組織化の段階にあたる）として位置付けおり，質的転換の時期とは捉えていなかった。

これに対し，発達の基本構造を「可逆操作の高次化における階層－段階理論」として理論化を試みた田中（1987）は，９，10歳の節目を生後第４の発達の階層（変換可逆操作の階層）へ移行する質的な転換期として捉えていた。また田中（前出）は，9，10歳頃に始まるこの階層では，集団的自己の形成がおこなわれていくと述べていた。集団の中での自己や自己のあり方を客観的に捉えるようになる過程であると考えられるが，時期Ⅱから時期Ⅲにかけてみられてくる，社会問題やその解決を願いのテーマとするといった特徴は，人全体や社会とのつながりの中で自己を捉えていることの表れとみることができるのではないだろうか。なかでも，例えば時期Ⅱの「大とうりょうになって人のためになること」（Case. 99，９歳後半），時期Ⅲの「５－２組のみんながしあわせになること」（Case. 165，10歳後半），時期Ⅳの「みんなに生きてほしい」，「大人になったら，たくさんの人をすくえること」（Case. 189，12歳前半）等の事例は自己と集団とのつながりや，その中での自己のあり方がよく表れていると言える。

以上より，本研究で得られた時期区分は，田中の「可逆操作の高次化における階層－段階理論」によっても説明できる可能性が示唆された。ここでも仮に比定を試みると，時期Ⅰ（６歳前半から８歳前半）は３次元可逆操作期，時期Ⅱ（８歳後半から９歳後半）は１次変換形成期，時期Ⅲ（10歳前半から11歳前半）は１次変換可逆操作期，時期Ⅳ（11歳後半から12歳前半）は２次変換形成期にあたるのではないかと考えられた。

(3) 本研究の成果と今後の展望

以上，パイロット・スタディーにより学童期の発達の基本構造を検出するためのいくつかの観点を示すことができた。また学童期の発達を把握するための方法論の検討として，課題への適応ではなく，課題への取り組み方を分析することが有用かつ重要であることも示唆された。

ただし，パイロット・スタディーであるために，取り出された時期やそれらの特徴はまだ仮説である。またピアジェにしても，田中にしても，その理論と本研究で得られた時期区分との比定も限定的なものである。今後，本研究で得られた知見を元にそれを検証するための実証研究を重ね，学童期の発達の基本構造に迫っていきたい。

注

1）　カテゴリー名やその内容は，藤崎・麻生（2018）のTable2より引用した。各カテゴリーの内容は以下の通りである。

「A. 所有物」：現実に手に入れられるモノや財産を願う，「B. 社会的正義」：社会一般の視点から正義を願うもの，「C. 将来・仕事」：自分自身の将来のなりたい姿に関わる内容，「D. 個人的要求」：1. 一般的幸福：幸せになりたい，楽しく暮らしたいなど，2. 現実的要求：現実に実現可能な体験，3. 自己変革：自分自身の能力の向上を願う内容，4. 自己の魔術的変化や考え：ファンタジー的な変身願望や非現実的な行為や状態，5. 人間関係：人との関係性についての願望，「E. 家や学校の環境の変化」：家庭内環境，住居環境，学校環境の変化を望

むもの，「F. 海外旅行・冒険・休暇」：海外旅行・冒険・休暇を望む回答，「G. 恐怖からの回避」：自己や他者の死や病気の回避，「H. その他」：秘密と答えたり，質問の意図がわかっていないような回答，「I. なし・わからない」：ない，何もお願いしない，しらない，わからない，など。

２） 本研究では各年齢群において出現しやすい回答内容（カテゴリー）を捉えるため，表３には参加児426人×３回答の合計1278回答を分類した結果を示した。ただし先行研究では３つの回答のうち少なくとも１つで各カテゴリーの回答があった場合の出現状況を分析しているため，先行研究の結果との比較においては注意しておく必要がある。

３） 2）の通り，分析の進め方が異なっていることにより「D. 個人的要求」についてはこの上位カテゴリー同士の比較はできなかったため，ここでは下位５カテゴリーについて先行研究と比較した。

４） ピアジェの発達段階については，中垣（2007），p. 59, 表10-1を参考にした。なお，この表は中垣がピアジェの議論を基に作成したものである。

付記

１） 本研究の実施にあたり，ご協力いただきました皆様に深くお礼申し上げます。

２） 本研究は，科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）19K03246，研究代表者：竹内謙彰）の研究支援を受けて実施された。

引用文献

藤崎亜由子・麻生武（2018）就学前児はどのような「願い」を持っているのか ―「３つの願い」という方法を用いて―，子ども社会研究，24号，pp. 95-113

金田利子（1979）子どもの人格・内面理解の理論と方法（Ⅱ） ―人格・内面に関する実態調査のこころみから―，日本教育心理学会第21回総会発表論文集，pp. 176-177

中垣 啓（訳）（2007）ピアジェに学ぶ認知発達の科学 北大路書房

Piaget, J., & Inhelder, B. (1966) *La psychologie de l'Enfant*. Paris: Presses Univ. de France.（ピアジェ，J・イネルダ，B. 波多野 完治・須賀 哲夫・周郷 博（訳）（1969）新しい児童心理学 白水社）

清水里美・清水寛之・千野美和子（1993）「３つの願い」に関する発達的研究Ⅰ―公立中学校に在籍する児童の反応―，日本教育心理学会第35回総会 発表論文集，p.93

清水寛之・清水里美・千野美和子（1993）「３つの願い」に関する発達的研究Ⅱ ―数量化Ⅲ類による中学生の反応の分析―，日本教育心理学会第35回総会 発表論文集，p.94

清水里美・清水寛之・千野美和子（1994）「３つの願い」に関する発達的研究Ⅲ ―女子短大生と女子中学生の反応の比較検討―，日本教育心理学会第36回総会 発表論文集，p.175

清水寛之・清水里美・千野美和子（1994）「３つの願い」に関する発達的研究Ⅳ ―数量化Ⅲ類による女子短大生の反応の分析―，日本教育心理学会第36回総会 発表論文集，p.176

清水寛之・清水里美・千野美和子（1995）「３つの願い」に関する発達的研究Ⅴ―大学生の反応の特徴（1）―，日本教育心理学会第37回総会 発表論文集，p.462

清水寛之・清水里美・千野美和子（1996）「３つの願い」に関する発達的研究Ⅵ ―高齢者の反応の特徴（1）―，日本教育心理学会第38回総会 発表論文集，p.49

新版Ｋ式発達検査研究会（2020）新版Ｋ式発達検査2020解説書（理論と解釈）京都国際社会福祉センター

竹内謙彰（2017）「三つの願い」質問はどのような心的内容に迫りうるのか，立命館産業社会論集，第53巻第２号，pp. 63-75

田中昌人（1987）人間発達の理論 青木書店

Winkley, L (1982) The implications of children's wishes －Research note－ *Journal of Child Psychology and Psychiatry,* Vol. 23, No. 4, pp. 477-483

Research Note

An Attempt to Detect the Basic Structure of Development in School Age Children:
From an Analysis of the “Three Wishes”

TOMII Nanami[i]

Abstract : This is a pilot study to detect the basic structure of development in school-age children from an analysis of the “Three Wishes”. A characteristic of school-age children’s responses to the “Three Wishes” is that there are many answers about future dreams & jobs, and social justice. However, after late in the 11th year of age, the categories of future dreams & work suddenly decreased, and responses of self-transformation increased instead, suggesting that a characteristic of older children is that they deepen their realistic self-understanding. Also, the study suggested that four periods can be considered to be the basic structure of development. Period I is from early in the 6th year to early in the 8th year, Period II is from late in the 8th year to late in the 9th year, Period III is from early in the 10th year to the age of 11, and Period IV is from late in the 11th year to early in the 12th year. Furthermore, these four periods were inferred to be characterized by Piaget's concepts of decentration and concrete operation, and Masato Tanaka's concept of the collective self-concept.

Keywords : development in school children, the basic structure of development, “Three Wishes”

i Associate Professor, Center for Special Needs Education, Nara University of Education